

えほんたいこうき

絵本太功記

〔解 説〕寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段

の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔あらすじ〕主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。光秀の母さつきは、主君を討った光秀を許さず、一人尼ヶ崎に転居するのですが、そこへ光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつた久吉が一夜の宿を乞うのです。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。すると最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。十次郎は敗戦の様子を伝えて息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのでした。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

尼ヶ崎の段

月漏る片庇

こゝに刈り取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現れ
出でたる武智光秀

「必定、久吉このうちに忍びゐるこそ究竟一。只
一討ち」

と気は張り弓、心は弥猛藪垣の、見越しの竹をひつ
そぎ鎧。『小田の蛙の啼く音をば、止めて敵に悟ら
れじ』と、差し足抜き足窺ひ寄り、聞こゆる物音、
『心得たり』と、突つ込む手練の鎧先に、『わっ』
と魂消る女の泣き声、『合点行かず』と引き出す手
負ひ。真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒
「ヤア、こは母人か。し為したり。残念至極」

とばかりにて、さすがの武智も仰天し、たゞ呆然た
るばかりなり。声聞き付けて駈け出る操、初菊もろ
とも走り出で

「ノウ母様か情ない。この有様は何事」
と縋り歎けば、目を見開き

「嘆くまい。内大臣春長といふ主君を害せし武
智が一類、かくなり果つるは理の当然。系図正しき
我が家を、逆賊非道に名を穢す、不孝者とも悪人と
も、たとへがたなき人非人。不義の富貴は浮かべる
雲。主君を討つて功名顔。天子將軍になつたとて、
野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか。主
に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立たば、物相
飯の切米も、百万石に勝るぞや。おのれが心たゞ一
つで、印は目前これを見よ。武士の命を絶つ、刃も

多いにこのやうな、ひつそぎ竹の猪突き鎧。主を殺した天罰の報ひは親にもこの通り」

と、鎧の穂先に手をかけて、袂り苦しむ氣丈の手負ひ。妻は涙にむせ返り

「コレ見給へ光秀殿。戦の門出にくれぐれも、お諫め申したその時に、思ひ止まって給はらば、かうした歎きはあるまいに、知らぬ事とは云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞ。せめて母御の御最期に、善心に立ち返ると、たった一言聞かしてたべ。拝むわいの」

と手を合はし、諫めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き。操の鑑曇りなき、涙に誠表せり。光秀は声荒らげ

「ヤア猪口才な諫言立て。無益の舌の根動かすな。

遺恨を重ねる小田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我が諫めを用ひずして、神社仏閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門の習ひ天下の為。討ち取つたるは我が器量。武王は殷の紂王を討つ。北條義時は帝を流し奉る。和漢ともに、無道の君を弑するは、民を休むる英傑の志。女童の知る事ならず。退りをらう」

と光秀が、一心変ぜぬ勇氣の眼色、取り付く島もなかりけり

ごたいへいきしらいしばなし

碁太平記白石噺

〔解説〕

安永九年（一七八〇）江戸外記座にて初演。紀上太郎、烏亭焉馬、容楊黛の合作による全十一段の時代物です。由比正雪の乱に、奥州白石であつた姉妹の仇討ちの実話を絡ませた筋書きですが、仇討ち物なので時代を太平記の時代に置き換えています。七段目で姉妹が巡り会う「新吉原揚屋の段」は、姉妹の言葉使いの違いがおもしろく、芝居でも人気となり度々上演されています。

〔あらすじ〕

大黒屋の傾城宮城野は、大黒屋の亭主惣六が連れてきた田舎娘おのぶが故郷に残した妹だと気付き、二人きりになったところで母親が持たせた証拠を互いに見せ合い、再会を喜びます。しかし、おのぶの口から父母の死を聞き、妹とともに父の仇討ちを決意し、廓を抜けだそうとします。それを立ち聞きしていた惣六は、曾我兄弟の仇討ち物語を引き合いに出して二人を諫め、その時が来るまで待てと諭すのでした。

新吉原揚屋の段

入相の、鐘さへはやく、暮れはてゝ廊のうちは万灯会歌舞の菩薩の色揃へ、わけて全盛宮城野が部屋は上品奥二階、箆筒長持鏡台の、埃取りまで綾錦襦紗なりけるありさまなり

見やる宮城野おのぶが傍、『もしやそれぞ』と摺り寄つて

「さつきからの話を聞けば、姉を尋ぬる人さうな、奥州はどちらの生まれ、なんといふ所ぢやえ」

「アイサア、奥州は白坂近在、逆井村といふ所」

「フウその逆井村といふ所に、与茂作といふお人があらうかの」

「アイサ、その与茂作といふのはめらしが父」

「ヤアそんならわしが妹」

と縫り寄るを突退けて

「イヤサ／＼、母の常に言はしやるには、『姉さあの方にもしるしがある、それを証拠に名乗り合ひ、委細心底打明ける』と言ひめした、それがあるなら早うつん出し、見せてくんせえ姉さあ」

と懐かしながら油断なき

「オ、利口な人／＼、疑やるも尤も」

と立つて箆筒の袋棚襖開けば恭しう、浅草寺の觀世音、扉表具に押並べ、飾り置いたる筒守り見るに妹も疾し遅し首にかけまく壺井の守り

「コレ／＼、この姉が国を出る時、母様が大事にせいと下さんしたこのお守り、父様は楠家のご浪人ゆゑ、河内の国壺井八幡様のお守り、それを持つてゐやるからは妹ぢや／＼コレ、よう顔見せてたもいなう」

「オ、姉さアでござるかいなう、会ひたかつた」

ともろともに、嬉し懐かし縫り寄り、ほかに詞もな

くばかり

「オ、妹、よう尋ねて来てたもつたの、年端もいかぬそなた、父様なりと母様なりと、いづれぞ付いてお出であらう、がもし道中ではぐれてか」

と、問はれて『わつ』と声を上げ

「ア、コレ／＼かう巡り会ふからは、悲しい事も何にもない、泣いては済まぬ、サどうぞ」

と、尋ぬる姉の心もそぞろ

「エ、遠国隔つた姉さあ、それで何にも聞かねえな、父は五月田植の時分、代官志賀台七という悪侍に」

「ヤア／＼何と言やる」

「ぶつ斬られてお死にやり申した」

「ヒヤア」

とびつくり差込む癢

「ア、コレ姉様いの／＼」

「ア、／＼とつとモウ悪い時、そうしてどうぢやそ

の後は」

「サア、なしよにもかしよにも俺だあけ一人、庄屋の伯父さアが引取つて、『奉公しろ』と言ひめすけど、何の奉公どころかい、口惜しいと、悔しいで、後先思はず、檀那寺へ駈込で、阪東順礼すると言つて笈摺もらい、国元さアを突走つたも、そんだに尋ね合つたら、姉妹心を一致にし申いて、父の敵が討ちてへばつかり、道中すがらの艱難も、そんだに会ふが楽しみに、がいに、苦勞とは思はなんだ、しかし会つたらかつぱりと、しよろつ骨が抜けたやうな、コレそれがいに歎かつしやる手間で、妹はるばる尋ねてよう来てくれた、めぐいめらしと言ふてくんせい姉さあ」

と、あやも泣入る稚な氣に長の旅路の憂き苦勞、思ひやるせも宮城野に、続くは末の、松山を、袖に、波越す涙なり

歎きのうちも姉はなほ、妹が背を撫でおろし

「オ、そのやうに思やるも尤も、しかしそなたは父母に、長う添やつた身の果報、コレこの姉を見やいなう、年貢に迫つて父様は水牢、その苦を助けうばつかりに、コレこの廓へ身売つたを、思ひ返せば十二の年、そなたは五つ子顔さへ見知らず父様のご最期や、母様の死に目にも会はぬといふ悲しい不孝な、はかない事があらうかいの、かうした事とは露知らず、この妹は健なか知らぬ、父様、母様、お煩ひでもあらうなら、よもや知らして給らうもの、便りのないを杖柱、首尾よう年季を勤めたら、国へ帰つてお二人に、樂させまして、どうしてと、色や浮氣を嗜んで、勤め大事と許嫁の殿御の事も、そなたの事も、恋し懷かし思ふのを樂しみ暮した甲斐もなう、名乗り合うたは嬉しいが、悲しい話聞く姉が心も推してたもいの」

と、手を取交す姉妹が涙

涙を、立聞きも貰ひ泣きして立分の、暖簾も濡る、ばかりなり

はですがたおんなまいぎぬ

艷容女舞衣

〔解 説〕 安永元年（一七七二）大坂豊竹座初演。作者は竹本三郎兵衛、豊竹応律、八民平七。美しい人情を

描いた世話物の代表作です。中でもお園のクドキ「今頃は半七様どこにどうしてござろうぞ」はよく知られています。元禄八年、大阪千日前での赤根屋（茜屋）の半七と美濃屋の三勝（さんかつ）が心中した事件が歌舞伎となり、二十五年を経た享保四年、紀海音が『笠屋三勝廿五年忌』という浄瑠璃を創作しました。その後更に笠屋を実説美濃屋にし、半兵衛やお園を配した『女舞剣紅楓』の筋を受け、発展させたものがこの作品です。上中下三巻に分かれ、下の巻の、「上塩町の段」が「酒屋の段」となります。

〔あらすじ〕大阪上塩町の酒屋「茜屋」に幼子をつれた女が酒を買いにあらわれ、子どもをおいて姿を消します。この店の息子半七は、お園という貞淑な女房がいるものの、以前から美濃屋の三勝という遊女となじみ、二人にはお通という子どももありました。半七はふとした廊のいきさつで、人殺しの科人となってしまいます。半七の父半兵衛は、一度は息子を勘当したものの、不憫に思い、代官所で息子の罪を引き受けて縄にかかります。

一方、お園の父宗岸は、半七の不行跡に愛想をつかし、一旦はお園を実家へ連れ戻したものの、お園が悲しみに沈んでばかりいるので、再び嫁として迎えてくれるように半兵衛に頼みに来ます。お園は夫に嫌われるのは己の至らなさからと、ひとり寂しく半七の身を案じます。そこへ置き去りにされた子どもが現れ、半七と三勝の娘お通であることがわかります。一同はお通の守り袋から出た書き置きを読み、半七と三勝の死の覚悟を知り、悲嘆の涙にくれます。二人は店の外でその様子をうかがい、万感の思いを残して去って行くのでした。

酒屋の段

こそは入相いりあいの

かねかちりちゆくゆはな

鐘に散り行く花よりも、あたら盛りさかりをひとり寝ねの、

おそのおつれつてておや

お園を連れて父親が、世間構せけんかまはぬ十徳じゅとくに、丸いあた

まの光りさへ、子ゆゑに暗む黄昏時。主の妻は灯を

ともし表を締めにいそ／＼と、出ひ合頭に

「ホ、これは／＼宗岸様そうがん。そちらにゐやるはお園ぢ

やないか」

「アイ母様。お変わりもござりませぬか」

と言いう挨拶もどこやらに疵持いつ足の踏みどさへ、低

き敷居も越えかぬる。宗岸は遠慮なく

「半兵衛殿お宿にか」

と娘を連れて打ちとほれば

「サア／＼先まずお上りなされませ」

と奥底おくていもなき詞しのうち、それと聞くより半兵衛が、

一ひと間まを出づるしづ／＼顔かお

「娘むすめを連れて去なれたからは、こちのうちに用はな

い筈。何のためにござつたこと」

と針持はりもちつ詞に、妻は氣の毒

「ア、コレイノコレ親父殿／＼ホ、／＼、ホ、

イヤモ人様に追従ついしょう云はぬ偏屈なこちの人。必ずお氣

に障さえられて下さりますな、この間は嫁女の帰つてゐ

られました、いかいお世話でござりませう」

「なんの／＼。半兵衛殿の立腹は皆もつとも。三勝さんかつと

やらに心奪はれ、夜泊まり日泊まりして女房を嫌ふ

半七。所詮末のつまらぬこと、無理に引つ立て去ん

だのは、娘にひけを取らずまいためおれが氣迷ひ。

それから思案するにつけ、唐からも倭やまとも一旦嫁にやつた

娘。嫌はれうがどうせうが、男の方から追ひ出すま

で、取り戻すといふ理屈はない筈。こりや宗岸が一

生の仕損なひと、悔んでもあとの祭。園めも昼夜泣

き悲しみ、朝夕も進まねば、もしや病が起ころうか

ちようせき

と、見てゐる親の心は闇。おれも天満に年古う住ん

でゐれば、人に理屈も云ふ者なれど、誤りは詫びね

ばならぬと、年寄りの面押しぬぐうて来ました。な

つら

にかのことは料簡して、今までのとほり嫁ぢやと思

うて下され。コレ頼みます。頼みます御夫婦」

と謝り入つたる挨拶に、園もうち／＼手をつかへ

とじ

「父様の一徹で、無理に連れられ帰りしが、一旦殿

御と極まつた半七様。嫌はれるは皆、私が不調法、

とが

鈍に生れたこの身の科、今から随分お氣に入るやう

に致しませうほどに、やつぱり元の嫁娘とおつしや

つて下さりませ。お二人様」

とあとは詞も涙なり

「オ、なんのマアそつちさへその心なら、こつちは
変はらぬ嫁姑、ナウ親父殿さうぢやないか」

たいこうぼう

「イヤさうぢやない。昔唐にも例がある。太公望と

やらしい人の妻、夫に暇取り月日を経て詫び言に來

たりし時、鉢の水を大地にあげさせ、その水を鉢へ

入れよ。元のごとく夫婦にならんと、太公望が云は

れたと、いづぞや講釈で聞いて來た。それと丁度同

じこと。こなたの方から無理暇取つて、今更嫁と思

へとは、モ、モ、いつまで云うても返らぬこと。口

詞叩かずと、はやう連れて去なつしやれ、エ、去な

つしやれ」

とにべもしやくりも納戸口、顔を背けてゐたりける

「サ、その腹立ちは尤も／＼。が重々不調法は、

コ、このあたまに免じて料簡して、どうぞ嫁に」

「嫌でござる。忝めは勘当したれば、嫁というべき

者もない筈」

「サそれも懲らしめのため、当座の勘当」

「イヤ当座でない。七生しちしょうまでの勘当」

「ム、そのまた七生まで勘当した半七が代りに、こなたなんで縄にかゝつた」

「ヤア」

「サア半七とは親でも子でもないこなたが、今日けふ代官所でなんのために縛られて戻らつしやつた」

と思ひも寄らぬ宗岸が、詞にびつくり驚く女房。嫁もともど立寄つて、肌押し脱がせば半兵衛が、小手をゆるめし羽交はがい締め

「ナウ情なや何ゆゑ」

と嫁はうろく、女房も取付き歉けば、宗岸が

「イヤ、まだく驚くことがある。婿の半七は人殺し、お尋ね者になつたはいの」

と聞くより二人はまたびつくり

「それはなにゆゑどうした訳。様子を聞かして、コレ半兵衛殿」

と問へどもさらに返答は、差し俯うつむいて詞なし。宗岸涙の目をしばたゝき

「一昨日おとといの晩山の口で善右衛門を殺したは、茜屋の半七と、噂を聞いた時は、驚くまいかびつくりせまいか。膝も腰も抜け果てしが、ア、思へばく不孝者。よい時に勘当さしやつて、親に難儀のかゝらぬは、まだこの上の仕合はせと、思ふたは他人の了簡。

違ふこなたの縛り縄、科極まつた半七が命、一日なりと延ばしたいと、人殺しの科を身に引き受け、縄かゝつたこなたの心は、真実心しんじつしんに子を思ふ親の誠と、知れば知るほど宗岸が仕損ひぢや。半七が身の難儀。こなたも勘当してしまひ、おれも娘を取り戻したら、

親にかゝる首綱もなく、よいことしたと世間から、

褒める人もあらうが、親となり舅しゅうととなるが、マゝ、

大抵深い縁かいなう。かういふ仕儀になつた時は、

褒めらるゝより笑はれるが親の慈悲。へんし片時もはやう

と連れてきた心はの、一旦嫁におこしたれば、半七

が嫌がるならハテ尼にしてなこのうちで、御夫婦

の亡き跡の、香花なりとも取らして下され。コレ手

を合はして頼みますくゝわいのふ。詫び言が叶はね

ば、引き離されたと突き詰めて、短慮な心も出しを

ろかと、案じ過こして夜の目も合はず、アゝ母親は

なし、たつた一人。あいつを思ふおれが因果。こな

たの縄目も半七が、科人になつたらなほ可愛かる。

たとへ勘当じょうとうが定きょうでも、久離切きゅうりきつたが誠でも、真実親

子の肉縁は、切るに切られぬ血筋の親。おれもこな

たほどはなけれども、娘は可愛い。まして勘当はせ

ぬ娘。愚痴なと人が笑はうがおりや可愛い、不憫に

ござる。可愛い、可愛いくゝござるはいのふ。コレ

聞き入れてたべ半兵衛殿」

とこれまで泣かぬ宗岸が、堪こたへに堪へし溜め溜めを

たくしかけたる叫び泣き。我が強う生まれし半兵衛も

舅の心根思ひやり

「ヲゝ道理ぢやくゝ、宗岸殿」

とあとは詞もないぢやくり。妻も、お園も一時いときに、

四人が涙高水に、樋の口あけしごとくなり。半兵衛

やうく顔を上げ

「云はねばならぬこともあれど、孝行な嫁女の手前、

胸につまつて云ひにくい。ナニ宗岸殿。奥の間で云

ひ明かさん。コレお園。そなたをさらくゝ嫌ふぢや

ない。気にかけてたもんなや。舅殿へ話すうち、し

ばらくこゝに」

と三人は、しをく奥へ泣きに往く、心の内ぞ哀れなる

跡には園が憂き思ひ。かゝれとしてしも烏羽玉うばたまの、世の味気なき身一つに、結ばれ解けぬ片糸の、繰り返したる独り言

「今頃は半七様、どこにどうしてござらうぞ。今更返らぬことながら、私わしといふ者ないならば、舅御様もお通つうに免じ、子までなしたる三勝殿を、とくにも呼び入れさしやんしたら、半七様の身持ちも直り御勘当もあるまいに、思へばくこの園が、去年の秋の煩ひに、いつそ死んでしまふたら、かうした難儀は出来まいもの。お氣に入らぬと知りながら、未練な私が輪廻りんねゆゑ。添ひ臥しは叶はずとも、お傍あたにゐたいと辛抱して、これまでゐたのがお身の仇。今の思ひにくらぶれば、一年前にこの園が死ぬる心が

エ、マつかなんだ。堪こらへてたべ半七様、私やこのやうに思うてゐる」

と恨みつらみは露ほども、夫を思ふ真実心なはいや増さる憂き思ひ

くるわぶんしょう

曲輪文章

〔解説〕

正徳二年（一七一二）大坂竹本座初演。近松門左衛門の作。大坂の新町に実在した芸妓夕霧にちなんだ物語で、本来は「夕霧阿波の鳴門」という上中下三巻の世話物です。名妓と言われた夕霧の没後には、追善として数多くの芝居の作品が生み出されましたが、この作品は中でも代表作となっています。上巻だけが独立して「廓文章」として度々上演されています。

〔あらすじ〕

新町の名妓夕霧と深い仲になった伊左衛門は、多額の借財を作り、親から感動され放浪の身となってしまいました。夕霧も心痛のあまり患ってしまいます。暮れの支度に華やぐ廓。吉田屋の座敷に呼ばれた夕霧は、図らずもみすばらしい紙衣（かみこ）姿で吉田屋亭主を尋ねてきた伊左衛門と再会するのです。しばらくぶりに逢った二人は、互いに恨み言を言い合うのですが、伊左衛門の母が勘当を解いたという知らせが届き、夕霧の病も癒えて、円満な幕引きとなります。

吉田屋の段

冬編笠の垢ばりて、紙子の火打膝の皿、笠ふき凌ぐ忍ぶ草、しのぶとすれどいにしえの花は嵐の颯に、けふの寒さを喰ひしるる

はみ出し鍔も神さびて鎧つまりし師走の日、胡散らしく吉田屋のうちを覗いて

「喜左衛門、宿にかちよつと逢ひたい、喜左、喜左」

と鼻に扇の横柄なり

「喜左衛門に逢ひたいと仰せあるは、どなたでござります。どなたでござる」

と笠を覗いて

「ヤアお前は伊左衛門さま」

「なんと喜左。なつかしさに逢ひに来ました」

「ア、お懐しや／＼。京大仏、馬町に御逼塞と承はり、夕霧さまより数通の御状飛脚も二三度、エ、奈良大津まで尋ねさせ、たつた今もお噂。ガまづお馴染みの小座敷で、二年積るお物語。サア／＼、奥へ／＼」

と袖ひけば

「ア、コレ喜左。さりとは紙子ざはりが荒い／＼」
引けば破れる掴めば跡にしはす浪人。昔は鎧が迎ひに出る。今はやう／＼長刀の、草履をぬいで編笠の中の、座敷に通るける

「コレハ／＼お珍らしや伊左衛門さま。ようこそお出でなされました。モウお噂ばかりまうし暮してをりました。ガまづ御祝儀のお盃をいたしませう」

「イヤコレ内儀。喜左衛門といひこなたといひ、昔のよしみを忘れず、ねんごろに蓬萊とまでは気がつ

けども、夕とも霧とも得いひ出さぬ。ほのかに聞けば夕霧は、身がことを氣病みにして、命危ふしと聞いたが、きつう重いか。ただしまた無常の夕霧と消え失せてしまふたか。歎きをかけまいとていひ出さぬか。ア、コレ誓文で泣くまい。サ、語って聞かしや。泣かぬく」といふ声も、氣づかひ涙濁りける

「ヤこれはお道理。イヤモ夕霧さまの御氣色も、秋の頃はさんぐで、勤めもお引きなされしが、エ、寒に入つて大きに御快氣。すなわち阿波のお侍さま、正月もなさる筈で、今日は私が方へ、お出でなされてござります」

「ヤアそれは誠か、真実か」

「ハテ嘘か誠か隣座敷ちよつと覗いて御覧じませ」

伊左衛門『はっ』と急いたる顔色にて、しばし詞もなかりしが

「ノウ内儀。天地開き始まりてより、誠のある傾城と迦陵頻伽の雄鳥は、絵に書いたも見たものがない。総嫁のやうな傾城めに、モ微塵も心は残らねど、知つてのとほりあいつが腹から出た倅、しかも男子で明ければ七つ。遣手の玉が才覚で、里にやつたやら。定めてやつたもいつはり、捻殺してかな棄てつらう。阿波の客といふも合点。この前身どもと張合うた阿波の大尽平といふもの。ア、つらく思へば傾城買より紙屑買ひがましぢや。サなぜといや。金出してこの方へ取るものとは状文ばかり、七百貫目が紙屑ではナ富士の山を張抜きにせうとまぢや、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。仕合せの悪い時、なん

で損をせうも知れぬ。無用の涙で紙子の袖を濡らした。継目の離れぬそのさきに罷り帰らう」

「ア、もうし／＼それはあんまり慳食ともうすもの。まづ夕霧さまに逢はせませう」

「ア、イヤ／＼慳食ならば夕霧より、フン蕎麦切りにでもいたさう」

「それはあんまり御短気な。奥のお客は平さまではござりませぬ」

「ア、イヤモ平でも壺でも、この方仕度はようござる」

とすね廻る。そのうちに奥座敷には手を叩く

「アレ禿衆はどこにぞ」

といひつゝ内儀は奥座敷、亭主もなんと気の毒顔

「ア、折角御機嫌よかったにまた例の御癩癩。たとへどのやうにお腹が立たうともこの喜左衛門に御

免じなされ、なんにもおつしやつて下さりますな。

あなたのことをいろいろと苦になされてのアノ大病。もしものがあつたらば、ア、まゝよ。ドリヤ首尾して参りませう」

と枕当てがひ喜左衛門、心残して奥へ行く

過ぎし夜すがの連れ弾きを、思ひ出して伊左衛門、腹立ち紛れに調子さへ、あはゞどうしてかうしてと、胸は二上り三下り、今の憂身も心から、思ひ廻せば奥の間の唄の唱歌に合の手や

ゝ可愛い男に逢ふ坂の関より、つらい世の習ひ

「オ、それよ、あの唄で思ひ出す去年の月見は奥座敷で、夜とともに飲み明かしたる大騒ぎ。太夫とお

れが連れ弾きで、弾いた時の面白さ。弾くその主は変らねど、変つたはおれが身の上、あいつが心底、

マあのやうにあらうとは」

「思はぬ人に、せき留められて、今は野沢の一つ水

「アいかさまさうぢや、恋も誠も世にある時、人の

心は飛鳥川、変るは勤めの習ひぢやもの、オッいつ

そ逢はずと去んでくりよ～～。アイヤ～～、

喜左衛門夫婦が志。逢はずに去んではマこの胸が」

「済まぬ心の中にもしばし、思はでうつす月の影

むざんやな夕霧は、流れの昔なつかしく飛立つ心奥

の間の、首尾は朽ちせね縁と縁、胸と心の相の山。

間の襖の工合よく、明け暮れ恋しい夫の顔見るに嬉

しく走り寄りわが身とともに襦袢に、引きまとひ寄

せとんと寝て抱きしめしめ寄せ泣きけるが

「もうし伊左衛門さん。目を覚まして下さんせ。わ

しゃ煩うてな。モとうに死ぬるはずなれども、今日

まで命ながらへしは、今一度逢はして下さんす、神

仏の控へ綱。コレ懐しうはないかいな、顔は見たう
はないかいな」

と揺り起し～～抱き起せば、取つて突退け

「ヤコレそこな夕霧殿とやら夕めし殿とやら。節季

師走にこなたのやうに隙ではござらぬ。七百貫目の

借錢負うて夜昼稼ぐ伊左衛門。こんな時寝ねば寝ら

れぬ。エ、邪魔なされな総嫁殿」

ところろとこけてそら酈

「身に覚えはなけれども、恨みがあらば聞きませう。

イヤ～～～寝さしはせぬ～～」

「エ、コリヤなんとする。この体になつても藤屋伊

左衛門。今のやうに奥座敷の客に踏まれたり蹴られ

たりする傾城に近附きは持たぬ。アノここな万歳傾

城。万歳ならば春おぢや。通りや～～～～」

「ムウこの夕霧を万歳とはえ」

「オ、万歳傾城の因縁知らずか。知らずば云うて聞かさう。コレ待の足にかけて蹴られるを、万歳傾城といふぞや。」

へ誠にめでたう候ひける

しかも足駄はいて蹴るやら

へ年立ち帰るあしだにて、誠にめでたう候ひける

しかしなにも身すぎぢや。あんなよい衆には蹴られても損はいかぬ。欲も知らねば身が立たぬ

へよく若に御万歳、年立ち帰るあしだにて誠にめでたう候ひける。町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、蹴るくく。コレ喜左。餅でも米でもはやうやつて去なしやいの」

と訳も涙の拾て詞。煙草引寄せ吹く煙管。そらさぬ体にてゐたりける。夕霧涙もろともに

「恨みられたり唧つのは、色の習ひといひながらそれは浮気な水浅葱、逢ひ染めてこひ紫とその日からこんな縁が唐にもあらうか。派手な浮名が嬉しうて、人のそしりも世の義理も、白紙に書く文の伝返事とする手も心せき、口舌の床のよしあしも、嬉しいにつけ悲しいにつれて忘れたことはない。それにお前の悪性を、わしが案じは移り気な、ほかにもしやといひがかり、背中合はして寝て見ても、ついそれなりに張弱く仲直りすりや、明けの鐘憎うてならぬ鳥の声、なんの鳥が意地悪で鳴くぢやなければきぬくの、いなせとむない心から、まゝにならぬは色の意地。広い世界に住みながら、狭う楽しむ誠と誠。それがかうじてうちかたの首尾は不首尾と結ばふれ、勘当の身とならの葉やこの手柏の二人が中、暇乞ひさへ泣くばかり、それから絶えて音信なく、この夕

霧をまだ傾城と思うてか。ほんの女夫ぢやないかいな。明くれば私も二十二、十五の暮から逢ひかかり儲けた子さへはや七つ。誠をいばこの頃は、一門中の状文にも『伊左衛門内より』と書いても人の咎めぬこと。私に恨みがあるならばこなさんにも恨みがある。去年の暮から丸一年、二年越しに音信なく、それは幾瀬の物案じそれゆゑにこの病。痩せ衰うたが目に見えぬか。煎薬と煉薬と針と按摩でやう／＼と命つないでたまさかに逢うてこなんに甘ようと、思ふところを逆様な、コリヤむごらしいマどうぞいの。私が心が変わったら踏んでばかり置かんすか。叩いて腹があるかいな。コレ死にかゝつてゐる夕霧ぢや。笑ひ顔見せて下さんせ。エ、エ、心づよや胴慾な、憎や」

と膝に引寄せて恨みつ泣いつ声をあげ、空に知られぬ袖の雨、隈なき夜半の月影も曇るばかりに見えにけり

かゝるところへ下女はした、遺手、禿に、女房もきほひかゝつて喜左衛門

「もうし／＼伊左衛門さま。もうし／＼伊左衛門さま。お前の親御妙順さまよりお人が参り、御子息さまも母屋へ引取りあなたも御勘気赦りました」

「ほんにそれいな太夫さん。お前も身請の埒が明き、大てい嬉しいことぢやない」

「オ、／＼この喜左衛門が精力で、本復さして見せませう」

と家内が勇む勢ひに、つれて本復伊左衛門悦びの、眉を開くや扇屋夕霧、名を万代の春の花。見る人、袖をぞつらねける